
月に叢雲花に風

村永央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に叢雲花に風

【Nコード】

N8648X

【作者名】

村永央

【あらすじ】

神通力をその身に宿す巫女、未来^{みく}。

そして、整った顔立ちだが素性を何一つ明かさないう怪しい男、御蔭^{みかげ}。

二人の共通点は相棒のフクロウと互いの不思議な力。

それは激動の時代に生まれた、一途な恋の物語。

時は戦乱。

各国の名だたる武将が、その手で天下を掴まんと、死闘を繰り広げていた。死闘と言うからには、犠牲や損害は多大なもので。無論、各地の人民は悲鳴をあげていた。

そんな中、人民が救いを求めたのは、宗教。藁をも掴む思いで、祈りを捧げる民達。だが、意外にもその信仰先はバラバラで、古来からの自然神や、外来した神々に祈りを捧げる者など、例えば家が隣であろうと、祈祷先は違っていた。

そんな中、ひっそりと、だが確実に力を伸ばす宗教が一つ。

名を、ミライ教。

未来という名の巫女を中心に廻る、新興宗教だ。

未来は、この世の理も動かせる程の神通力をその身に秘めた巫女で、信州の深い森の中に佇む、侘び寂びに富んだ神殿で毎日、平和を祈祷しているらしい。

らしいというのは、その神殿に辿り着ける者と着けない者がいるからだ。何でも、己の営利や欲の為にそこを目指すものは一生かかっても辿り着けないとか…。

だが反対に、肉親や他人、世界の為に命を投げ出す覚悟で来たものの前には、どこからともなく、きちんと整備された、境内へと続く石段が現れるのだ。

その石段を迷う事無く進めば、やがて大きな橋に出て、その橋の下に広がる池には鯉が悠然と泳ぐ。また進めば、今度は趣のある民家があり、その先に神殿があるのだとか。

だが、そこまで行けた者は数少ない。

しかし、行けた者は言うのだ。

巫女はまるで、神のようだと。

巫女はまさに、この世の創造神だと。

だから、人々は精進するのだ。

本当に困り果てた時、巫女に会えるよう、己を磨く。

聖典やそれに準ずるものは一つとしてないが、まるでそれが暗黙の了解のように執り行われる。

それが新興宗教、ミライ教である。

鳥の声が聞こえる。無数の鳥の声だ。カラス、ハト、ホトトギス。他にはキジや、めったにお目にかかれないう鳥の一番声が響く。

その中の一羽であろうか？

パサパサと自らの近くに飛んでくるであろう羽音が聞こえた。

薄目を開けば案の定、黒い陰が視界を丁度覆い隠す所で。急いで目を閉じれば、顔全体を羽毛百パーセントが包む。とても暖かい。ふわふわだ、気持ちが良い。

だが、呼吸が出来ない。

しかも、幾ら自分に懷いてくれてるとはいえ、相手は野生で生きている。身体を清める程まで行水する筈が無いし、第一そんな本能を持ち合わせている筈も無い。

まあ、所謂、獣の臭いが充満している訳で。

それが、風邪から直り立ての鼻をおかしくしてしまいそうだったので、私は慌てて言った。

「苦しいよ、琥珀」

顔の上に乗つかる生物を、両手で掴めば、手の中の物体は小さく鳴く。夜が明けてきた性か、夜行性のその子はとても眠そうで。パツチりおめめがうとうとと閉じかかっていた。

「お眠り」

穏やかな声でそう言えば、言葉が分かったのかは分からないが、手の中で一定の呼吸を刻みだした彼。

やっと巣立ったばかりの、大人とも子供とも言えない大きさの琥珀は、信州では珍しいシマフクロウの雄だ。訳あって私に懷き、私の部屋は、彼の住处と化していると言っても過言ではない。

そんな仲良しの琥珀をいったん布団の上に置き、私はまだ寒さの残る外へと向かう。

部屋を出、上を見上げれば、白んでくる空が視界を覆い尽くす。

すでに月は夜半のような神々しさを無くし、東の青空と一体化する準備が出来ているようだった。

そんな空を尻目に、私は急いで井戸へ向かうと、深い穴の中へ桶を落とす。

暫くの空気を切る音の後、ポチャンと水に到達した音が響き、それを合図に、上手く縄を操りながら、てこの原理を利用して、重たいそれをどうにか引き上げる。

桶の中に手を差し入れてみれば、指先から伝わる、心地よい水温。その水をたらいに移し、そこで手、顔を綺麗に洗う。

真夏ならば、ついでに水浴びもする所だが、季節は梅雨。大丈夫だと言う人もいるだろうが、個人的にはまだ寒く、昨日まで患っていた風邪を再発させてしまうと考え、それは止めた。

清めた顔や手を帯に引っかけてきた手拭いで拭き、たらいにのこった水は、そのままその場に流した。比較的近くに紫陽花の華があるので、彼等が吸い取ってしまうだろう。

急ぎ足で部屋に戻れば、まだ私が寝ていた温もりが残っているのか、琥珀が気持ちよさそうに眠っていた。

そんな琥珀を起こさないようにと細心の注意を払いながら、私は寝間着から、巫女が着用する巫女装束へと服を変える。

世間一般で着用されている着物より、巫女装束というのは簡易的に出来ているので、そんなに時間もかからずに着替える事が出来るので、私は好きだ。だが、それは個人的な感覚なので、好き嫌いは人それぞれだろう。

とにかく、早く着替え終わった私は、髪を整え、簪などを手早くさすと、扇を持って神殿へと向かう。

神殿は私が住む離れと隣接して建っている、神の住まう処。常にそこは清潔に保たれ、豪華な飾りで飾られている。

そんな神聖な場で、私は朝一番に踊りを捧げるのが日課…いや、習慣なのだ。

南蛮人など貿易をする国々にも、たくさん踊りはあるようだが、私が踊るのは侘び寂びに富んだ、舞。

毎日、違う舞を神々に捧げる。

神の前に人は平等と言うが、個人的な捧げの儀の時は別だと私は考える。

この神社に、神に仕える身分の者は私しかいないので、捧げ物をするときは、なるべく他の者はこの場所に入れないように努めている。

故に、私はいつも音無しで舞っている為、部屋には足袋が床をする、衣擦れの音しか響かない。

ススツツという音の中、私は無心で踊り続けたようで、一礼をし部屋を出た時には、既に太陽が空にお目見えしていた。

「未来様」

背後から声をかけられ振り返れば、そこには私の乳母であり、この神社の女中頭とも言うべき女性が立っていた。

「あら、お慎。おはよう」

にこりと笑って声をかければ、彼女は頭を下げながら問うてくる。

「おはようございます。朝餉の用意は如何しますか？」

朝ご飯……か。

今日は梅雨場なのに珍しく天気も良い。それに昨日の夕飯が、全て消化が早い物だったのか、寝起きから胃が物を求めていた。

故に答える言葉はこうだ。

「ご飯はいつもより多めにして頂戴。琥珀が待っているから、膳は部屋に運んでくれる？」

我が儘なお願いだが、彼女は嫌な顔一つせず、分かりましたと、ただ一言だけ言ってその場を去る。

彼女は私よりも年上で、彼女の父が学問に長けていた性が、彼女も読み書きが出来、世の事情にも詳しい。見た目美しく、彼女が街に買い物に行けば、必ず大荷物で帰ってくる。ただ、その九割が貰い物だとかでタダだというから驚きだ。

そのような人なのにも関わらず、傲ることは無く、自らの乳を飲ませた私を主としてたててくれる。お慎は慎ましく優しい、私にとって正に母のような存在の人なのだ。

とりあえず、お慎の素晴らしさは分かって頂けたと思うので、お慎についてはこれ位にして、私はそそくさと部屋に戻る。

障子を開き中を覗けば、女中の誰かが片づけてくれたのか、布団は畳まれ、琥珀は座布団の上に移動していた。

「琥珀？」

声をかければ、薄目を開き、寝ぼけているのかフラフラと飛んでくる彼。腕を差し出すが、彼は迷わず右肩に止まり、数秒も経たぬうちに再び舟を漕ぎ出す。硬い鉤爪でがっしりと肩を掴んでくる為、若干肩に爪が食い込むが、愛くるしい寝顔に全てを許してしまう。

右肩。そこが彼にとって落ち着く場所。別の言い方をすれば定位置なようで、腕を差し出しても止まる事はもう無い。幸せそうな寝顔を見つめ、自分自身も幸せな気分になりながら、私は恋しい朝餉を待った。

「いただきます」

その一言で始まった食事。本日のメニューは、白米に数種類の漬け物。あさりの味噌汁に焼き魚だ。無論、白米は指示した通りうず高くなっている。

健康の為に噛む回数は一口五十回以上。かの有名な弥生時代後期の巫女は百回噛んだと言うが、あの時代は今よりも遥かに固く噛みにくい物が主流であった事から、現在の食事には三桁越えの噛みは必要ないと判断し、半分の五十回にしている。

お慎が漬けたであろう沢庵が良いアクセントになり、箸が進んで気がつけば、膳は空っぽになっていた。

「御馳走様でした」

パチンと手を合わせて、軽く頭を下げる。

誰も見ていなくても、聞いていなくても行えと親から言われていたため、すっかり身についたその行為。

そして、十年前から身についた行為がもう一つ……。

自分の部屋を出、隣の割と大きな部屋に入る。

そこは常に清潔に保たれていて、箆笥や家具なども一式置かれているが、生活感は無い。

そこは、私の両親が寝食を行った部屋。

宮司であつた父と元巫女の母。私はその二人を十年前に同時に亡くした。

私はまだ、六つになつたばかりの幼子で、死という物がどの様なものかも上手く理解できないでいた。

だが、幼心に分かつたこともいくつがある。

両親にもう二度と会えないという事。

二人に変わり、私が主人になつたという事。

そんな事を二つ、三つ、その心で感じ、飲み込んだ。

涙は出なかつた。出したくもなかつた。

お慎に習い、毅然と振る舞う事を覚えた。

そして私はあれ以来、一度も涙を流した事は無い。

「お二方、本日はいい天気ですね。天界は心地良うございますか？」

仏壇に向かい、一方的に話す私。

相槌や返事が来る事は絶対に無いが、十年前以来、止められない行為。常に灯し続けてある蠟燭の火で線香を燃やし、手を合わせてから部屋を出る。

太陽は遥か高くまで昇り、日光がジリジリと肌を焼くようになってきた。

「お慎、お慎！」

声を張り上げて呼べば、どこからともなく現れる彼女。

「お呼びでございますか？」

台所作業でもしていたのか、袖を紐で留めた状態で現れたお慎。

私は彼女に朝餉の美味しさを述べてから、これからの行動を告げた。
「森を散歩してくる。客人がいらしたら、粗相の無いようにお迎えして、私を探しに来て頂戴。夕刻までには戻るわ」

「昼のご用意は？」

「知らないわ。あなた達だけ、好きなものを食べなさい」

それだけ言うと、私は踵を返し、一步を踏み出す。視界の端で、お慎が一礼してから台所へ戻るのが見えた。

右肩に止まりっぱなしの琥珀は、私が何をしていても起きることはなく、深い眠りにについているようだ。私は特別彼を気にすること
もせず、自らの向かいたい方向へ足を進めた。

さわさわと水が流れる川がある。

周りの木々達が蓄えた水によって形成される、小さな川だ。透き通った水の中を覗けば、小魚達が集団になり戯れていて。

「平和だなあ」

小魚達にちよっかいを出しながら、私はそう呟いた。

この神社：所謂、私の神通力の力が及ぶ地域を一步でも出れば、そこはもう戦火だ。

ついこの前も、戦で傷付き、国元へ帰る力もなく、隊から見放された兵士がやってきた。

彼の願いは、ただ一つ。

国元で暮らす妻子の幸せ。

ただ、それだけだった。

傷付き、病に犯されかけた身体では、持って二、三日。最期の力を振り絞り、この神社にやってきたのだという。

私は神通力を所持している為、その力を妬む者、羨む者が多い。故に、連れ去りは勿論、命まで狙われる事すらあった。だから私は、そのような邪な心を持った者は一切この神社にたどり着かぬよう、力をこの土地一帯に使っている。

その兵士は自らの身体をどうこうするよりも、故郷の妻子を想った。

だから、この場所に着けた。

そんな単純な事なのに、この社に着けぬ者は、この土地を訪れてくる者の九割を占める。

だからかは分らないが、兵士はどこか不思議な世界にでも迷い込んだかのような反応をしていたのを今でもありありと思い出せる。その後、私は兵士の心から家族との記憶を読み取り、神通力を彼方のご家族の元へと飛ばした。兵士の思う幸せに達するかは分から

ないが、家族が幸せに暮らせるように力を送ったと言えば、兵士は僅かに微笑んで、土下座をしてくれて。そのまま動かないので不審に思い、体を揺すれば、兵士は笑みを浮かべたまま絶命していた。

小川の水を足で掻きながら私は思う。

私も所詮、自らの身を守るために、邪な心で神通力を使っている。私も悪の心を持つ一人で、聖者では無いのだなと…。

ふと、自分の暗闇に気付いてしまった私は、思わず乾いた笑いを零した。

そして、その所為だろうか？いつもとは違う行動をとった時や干渉に浸った時程、嫌な事が起こるという噂が本当になってしまったのは。

「お前が、有名な未来教の巫女か？」

突如辺りに響いたその声に、私は思わず身を堅くする。急いで辺りに視線を走らすが、相手の姿は確認出来ない。

客ならば、こんな現れ方はしない。それに、客が通るはずのルートとは反対の所に此の場所はある。

つまり、相手は私の神通力、もしくは命を狙う者である確率が高い。

「奇襲か…」

一瞬、逃げると言う言葉が頭をよぎる。が、この状況からして中々の場数を踏んだ人物の奇襲法だ。幾ら此方に神通力があるとはいえ、一瞬の隙を突かれてしまえば、力を発動出来ない可能性だってある。

もし、仮にだ。仮にそうなった時、私の命が狙いなら…。思わずゴクリと唾を飲む。

だが、反対に抵抗しなかったとしても…命が狙いなら、どっちに

しろ終わりだ。

そんな事を考えていた性だろうか？

意外にも先に動いたのは彼で、自身が行動を起こすまで相手は動かないと踏んでいた私は、かなりの隙が出来てしまっていた。

「何とか言えよ、引き籠もりの巫女さんよお」

後ろだと気付いた時にはもう遅くて。

硬い腕で胴まわりを固められ、もう片方の手で顎を掴まれ持ち上げられた。

彼の顔を見た瞬間、私は時間が止まったかのように動けなくなってしまった。私は、彼の美しい顔立ちに見惚れてしまったのだ。

「引き籠もりの善人ぶった巫女と聞いて来てみれば、なんだ、下品な噂とは反して美しいな……。引き籠もりなんて言われているから、余程の不細工かと思っただぞ」

元服はとうに済んでいるであろう歳にも関わらず、鬘を結わず、一つに結んだ髪。真っ黒な髪とは相反して、その瞳は紅く、肌は全ての女性が羨むほどの純白さだった。

今まで一言も発せ無かった私だが、ここに来て漸く口が動く。

「お主、何者だ？私の神通力を破るなど、ただ者では無いな」

あくまで動揺を見せず、毅然とした態度で臨んだ一言目。

若干、声の上擦ってしまったが、この体勢ならば動揺していいようが、いなかろうが、上擦る事は有り得なくもない。そう自分の心に言い聞かして、真っ直ぐに彼の瞳を見つめる。

そんな私の態度に、彼はクスリと笑い、軽く微笑む。彼の顔が整っているからなのか、その笑みは妙に妖艶で。思わず、息をするのも忘れてしまう程だった。

「なあ、巫女さん。破ったと決めつけるのは早いんじゃないか？」

「…何故？」

彼の問いを、冷静に聞き返す。

侮られたらおしまいだ。そうなれば、私に残された道が、言いなりか、死しか無くなってしまう。そう思えてやまない私は、いつの間にか全身で彼を拒絶していたようで。彼は苦笑いしながら私に言うてきた。

「そんな怖い目すんなよ。フクロウちゃんだつて懐いてくれたんだぜ？」

そう言われて右肩を見れば、寝ていた筈の琥珀が何故か起きていて。まるで甘えるかのように彼に頭を擦り付けていた。

それを見た私は、思わず固まる。

「そ、そんな…。琥珀は私以外の誰にも懐かなかったのに…」

琥珀は心に傷を負っている。だからか余り人に懐かない。私でさえ、神通力を施しながら近付き、半年かかってやっと今の状態にこぎ着けたのだ。まさか、初対面の人に懐く事なんて…。

「不可能だ、有り得ない」

思わず呟いてしまったその言葉。しまったと思った時にはもう遅く、バツチリ彼の耳に私の呟きが入ってしまった後だった。

彼は私の呟きを聴き、僅かに口角をあげると、チエックメイトとでも言うかのように、返答しにくい台詞を述べる。

「それを言うなら俺にとっちゃ、神通力なんて有り得ない」

違うか？

そう言われ、私は否定する事が出来なかった。私が神通力を所持しているのは紛れもない事実。だが、世間の人から見たら、私は不可思議な人物である事も事実なのだ。

「そ、それは……」

思わず言葉をつまらす私。何か答えなくてはと焦燥する心とは裏腹に、頭の端では終わりの鐘が鳴り響き、覚悟の準備がし始められる。だが、彼の次の行動は、私が予想していたものとは全く違っていた。

「ま、だからミライ教なんて宗教が出来ちまったんだけどな…」

彼はそう言って、なんと標的であるはずの私から、手をはなした。それはもうスッパリと綺麗に間を空けて。

数センチしか無かった私と彼の距離は、単位が上がりメートルに。予想外所か、思いも寄らなかつた彼の行動に、私は思わず素っ頓狂な声を上げた。だが、それに対し彼はどうしたと言わんばかりの顔をしていて。だから私は逃げる事も忘れ、彼に問うた。

「何故？」

それに対し、彼の返答はただ一言。

「何が？」

は？此奴はうつけ者なのか？思わずそう思った。

何を言っているんだろ、此奴は。私を…始末しに来たのでは無いか？否、そんな筈は無い。こんな不信な現れ方をして下心が無かつた奴など居はしなかつた。絶対に彼もそんな一人に違いない。

「私を殺しに来たのだろう？いや、それとも拉致か？」

相手の顔色を伺いながら、言葉を選び、問う。だが、彼は俯き加減になり表情が読めなくなった為、下手な事を言ってしまうは大変だと考えた私は、真一文字に口を閉じた。

琥珀は肩から木の上に移動し、宝石のような二つの瞳で此方を伺っている。琥珀がとまっている木は私達から数メートルはあり、此処に来るまでは三秒は必要だろう。

三秒…

そう考え、ゴクリと唾を呑む。

一秒で発動、もう一秒で攻撃。三秒目には、全てが終わっている。…これなら琥珀がどう出たとしても巻き込まれる可能性は少ない。

頭の中でシュミレーションを行い、気づかれないように深呼吸をした。

琥珀が身体から離れてくれている今、攻撃を行わないなんて勿体無い。相手の目的や何やは不明だが、話の流れからして、私と同じく不思議な力を持っているようである。

その力も威力も分からない今は、逃げるのが妥当。せめて神殿内に入れさえすれば、一族の血肉を啜って力を保ってきた強力な結界が私を守ってくれる。

だから、少しだけで良い。

走って建物内に入れる、それだけの時間が欲しい。

それが私と琥珀、どっちも生き残れる道。そして、それ以外の道はどちらかが死ぬか、あるいは二人共…。

そう信じて疑わなかった私は、攻撃を繰り返す事に決めた。

そして…。

右腕を素早く天に向けて挙げ、神通力で足下の水を彼の顔に浴びせかけた。命中したのを見届けると、すぐさま左腕も右と同じように動かし、彼との間に土の結界を張る。

これで少しは時間を稼げる。そう思った私は、土壁を突破される前にその場を去ろうと、神殿に向けて二歩ほど踏み出したが、いつも自分の後ろを追いかけてくる音が無い事に気づき、近くの枝に視線を走らせる。

すると案の定、琥珀は先程の止まり木とそんな変わらない木にその身を預けていて。

「琥珀、おいで！」

琥珀を置いて行く訳にはいかない。そう思い右肩を差し出すが、琥珀は一向に動こうとせず、土の向こうの得体の知れない男の方をじっと見つめている。

「琥珀！」

何度呼び掛けてみても結果は同じ。二つの目玉は私では無く彼を探していた。その態度の変わりように、私はハッと気がつく。

「まさか、何か…術を？」

まさかと思いながらもそう呟けば、土の向こうから肯定を示す男の返事が返ってきた。

「ご名答だ、巫女」

ザクザクと枯れ葉を踏みつける音がした為、彼の方を振り返れば、

どうやったのか土の結界に穴が空けられ、そこを通って彼は再び私に近付いてきていて。

「そなた、やはり何かしらの術者だな」

一定の距離を保つ為、彼と同じ歩幅で後退りながらも琥珀をどうしようかと考える。

置いて行くのは簡単だ。けれど…。

琥珀と過ごして来た時を考えれば、置いては行けない。否、置いて行けるはずも無い。

「…その通り、我は術者だ。あえて何のかは言わんがな…」

一步、一步近付いてくる彼。一方私は、背後を大木に阻まれ行き先を失っていて。

神様！

思わずそう祈った瞬間だった。

「つと、おい、阿呆！」

何故か突然彼は慌てだし、それまでの冷静な面が一気に崩れる。思えば、かなり不自然だった。彼は太っている訳でも無いのに、懐…つまり、お腹の辺りが妙に膨らんでいた。それはつまり、服の中に何か忍ばせているという事で。

そして今まさに、その忍ばせていた物は自我を持ったようにごそごそと動いているのが見えて。彼は必死に動かぬように声をかけるが、その蠢き方は強くなるばかり。

おい、出るな！彼の必死のその言葉も虚しく、ひよっこりと懐から顔を出した、見慣れた生物。羽の色付き具合が多少は違うものの、宝石を思わせる瞳は琥珀と少しも変わらない。

「シマフクロウ…？」

驚きのあまり目をパチクリさせながらそう呟けば、彼はばつが悪そうに一回頷く。

「松葉、ほら」

彼が腕を差し出せば、パタパタと音をたててそこに止まった、松葉と呼ばれたその子。雄雌の区別は分からないが、雰囲気からして

女の子のようだ。

じっとその子を見つめれば、嫉妬したのか術の溶けた琥珀が、目の前を覆い隠すかのように顔の前で羽ばたく。

それを諫めるように右肩を差し出し、身体を掻いてあげれば、機嫌がなおったのか目の前の松葉ちゃんを観察し始めた。

「…ベツタリだな」

仲むつまじい我らを見てか、咳くように言われた其の言葉。顔は琥珀に向けたまま視線だけ男の方に移せば、彼はじっと何かを思い詰めるように私を見つめて。

その視線にたえられず、身体をクルリと反転させればクスリと一回笑われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8648x/>

月に叢雲花に風

2011年11月11日02時52分発行